

## Abstract

## 1980年から1994年までの包括的治療センターにおける第VIII因子および第IX因子使用量の変化

## The changing patterns of factor VIII (FVIII) and factor IX (FIX) clotting factor usage in a comprehensive care centre between 1980 and 1994

A. H. Miners, C. A. Sabin, K. H. Tolley and C. A. Lee

Royal Free 血友病センター（ロンドン）で患者に使用された凝固因子の年間量は1980年が400万IUであったのに対し1994年までに1,500万IUを超えるようになり有意な増加がみられた ( $p < 0.0001$ )。なぜこのように増加したのかを検討するために、この期間中の濃縮剤使用量に関するデータを血友病またはフォン・ヴィレブランド病患者についてレトロスペクティブに集めた。本検討の対象としてはセンター以外の施設には登録されていない患者のみに限った。全部で498人の患者が選定基準を満たしていた。1980年1月1日の時点で患者群の年齢の中央値は21歳（範囲1～69歳）であった。検討期間中の出産数は88例、死亡数は45例であった。大部分の患者は血友病Aであった（55%）。患者当たりの追

跡期間の中央値は2.1年（範囲0～14.8年）であった。患者数および体重変化について考慮しても、いくつかの患者サブグループでは凝固因子使用量が統計学的に有意に増加した。特に1980年代の後半以降の重症血友病AおよびB患者、フォン・ヴィレブランド病患者で顕著であった。凝固因子使用量増加の原因としては、製剤の改良が進んだことと予防的に使用されるようになったことの2つが考えられる。治療方針の変更の結果として生じた凝固因子製剤に関わるコスト上昇を切り離して解析することはできないが、別の治療分野でのコスト削減と治療効果の進歩に対するバランスがとれていなければならない。

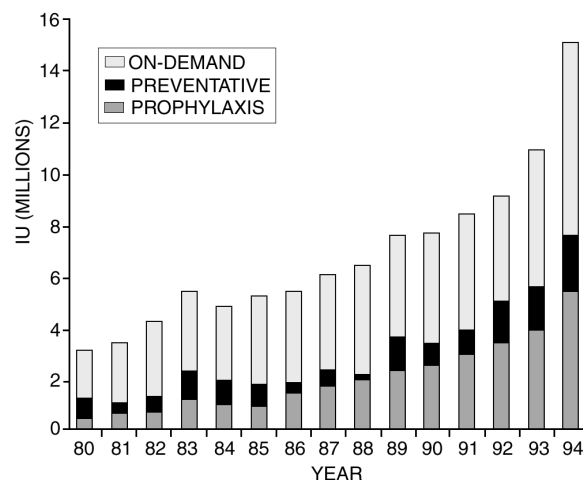


Fig. 5. Total clotting factor usage by reason for treatment between 1980 and 1994.